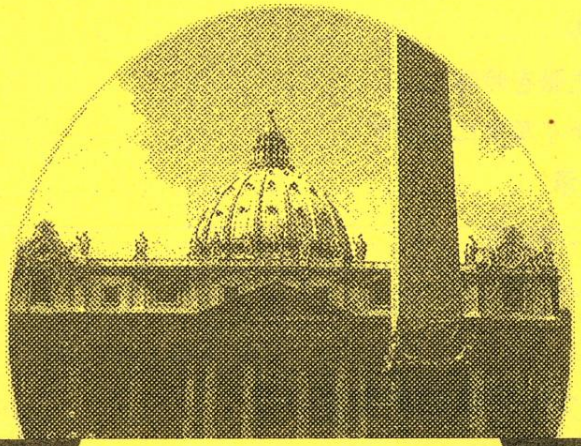
Anchor
アンカー

新共同訳聖書は「より良い聖書」か？



ローマへの
バイブルロード

第17号

目次

新共同訳聖書は「より良い聖書」か？

序 論 1

共同訳はいかにエキュメニカルに貢献しているか? 3

４世紀と２０世紀 6

聖書本文の二つの流れ 8

改悪聖書の歴史、流れ 10

新共同訳の底本 12

近代批評学の主張を吟味 13

バチカン－シナイ写本について 13

純粋な聖書の継承 13

ワルデンセスについて 15

エラスムスについて 17

欽定訳 19

ホワイト夫人の違った聖書翻訳の使い方 21

聖書本文について(その他のこと) 23

２世紀のパピルス写本はどうか？ 24

SDA特殊教理と新共同訳 26

１．ダニエル書９：２４～１７ 27

２．ダニエル８：１４ 28

３．ヘブル６：１９ 31

ローマへのバイブル・ロード 32

質問と答え 34

ニュース・コラム 36

新共同訳聖書は「より良い聖書」か？

判断の基準は学問か、霊感か

※この記事はアドベンチスト・ライフ１９９４年１２月号、１９９６年２月号と比較しながら読んでください。

序 論

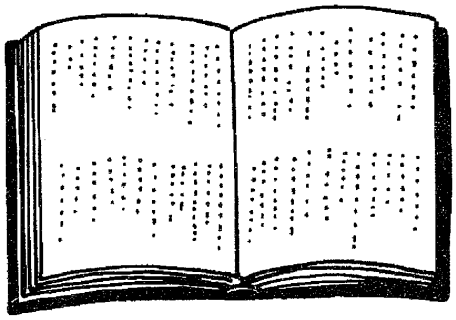
これまで、新共同訳に対する意見書や、アンカー誌によって共同訳について書いてきたが、様々な反応を受けた。初めて問題に気づき、もっと知りたいという感謝と励ましの便りも頂いた。また逆に、事実上の多くの誤りを含んでいるとか、カトリックに対してややヒステリックであるとか、欽定訳のみが間違いのない聖書であると主張しているように思えるとか、どの訳も聖書である限り奇跡的に守られてきたのであって新共同訳とて変わりはない、セブンスデー・アドベンチストの特殊教理に抵触することはない、教理は聖書に裏付けられるべきであって、聖書を教理に合わせるのは本末転倒である、等といったご批判、反論も頂いた。

科学、学問はそれ自体悪ではない。しかし、それが霊感、啓示と対立したとき、我々はどちらを選ぶべきか。新共同訳はより良い聖書と主張するとき、それは近代本文批評学という学問の立場に立っていることが分かる。我が教団も新共同訳聖書をより良い聖書としてしきりに勧めている現状は実に残念である。近代本文批評学の主張は、明らかに証の書の教えと異なるからである。

神の言葉は、「神の変わることのない生けるみ言葉…主の言葉はとこしえに残る」（Ｉペテロ 1:23,24）と言われているにもかかわらず、近代本文批評学の歴史を見ると、また聖書を比較、調査しても、変えられてきていることが分かるのである。

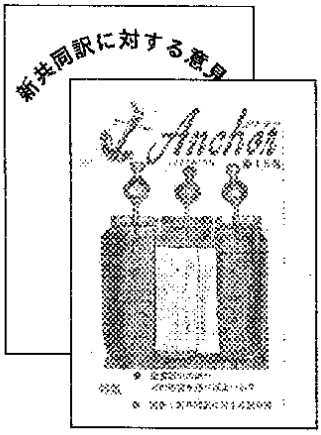
筆者はほとんどの人と同じように、聖書の翻訳は神が導いておられるから、問題は何もないと思っていた。翻訳の時点において少々変わってくるのは当然だと思って資料を取り寄せて読み始めた。しかし、この度カトリック、プロテスタントの共同訳についての説明を読んだとき、どうもおかしいと思い調べれば調べるほど、その意図していることに驚いたのである。それは明らかにローマのエキュメニカル運動、すなわち全キリスト教会をローマ・カトリックに「再帰」させるための手段、策略であることが分かる。我々は、聖書と証の書の預言から迷うことなく、ローマ・カトリック教会が主導権をとり、全キリスト教ばかりでなく、全宗教を支配しようとすることが狙いであることを見抜かなければならない。そしてそればかりでなく、全世界の政治、経済をも支配するのである。

そこで今回もう一度新共同訳聖書について考えてみたい。



共同訳はいかにエキュメニカルに貢献しているか?

まず我々がしっかり確認しておきたいことは、共同訳の発端はローマ・カトリックであるということ、彼らの狙いはエキュメニズム、全キリスト教を一つにし、彼らが主導権を握るということである。それはバチカン第二公会議で決められた戦略であった。そのことは、アンカー誌や、意見書でも既に述べた通りであるが、共同訳が教会一致運動にいかに貢献しているかを示す証言をいくつか引用してみたい：



「地上歴史のエキュメニカル時代のほとんど終わりにおいて、ローマ・カトリック教会はなおも欽定訳聖書を許容することができない。カトリックの書店で、すべての現代訳を買い求めることができるが、ローマ・カトリック教会によってさげすまれている欽定訳聖書は手にすることができない事実を知るとき、プロテスタントにとってそれは危険信号を意味するはずである。ローマ・カトリック教会の支配するアイルランドの首都ダブリンにおいて、改訳聖書についてなされたコメントはおそらく最も注目すべきものであろう。

『一つ確かなことは、改訳した聖書によって直接的にまた間接的にカトリックが勝利を得るであろうということである』 *Dublin Review*, July 1881, quoted in B.G. Wilkinson, *Our Authorized Bible Vindicated*, 228」(*Modern Bible Translations Unmasked*, Russell R. Standish and Colin D. Standish, p.62)。

バイブル・ロードから日本聖書協会の総主事、佐藤邦宏氏の言葉を引用しよう：

「しかし、ローマ・カトリック教会と聖公会のために『旧約聖書続編』つきが、日本でのみならず、世界各国で発行されたことによって、どれほど教会一致（エキュメニズム）の進展を見ることができたか分かりません」(バイブル・ロード p.145,146)。

「プロテスタントの聖書協会の働きを止めさせるのに失敗したローマ・カトリック教会は、今や彼らを支持しているように見える。イギリス海外聖書協会、アメリカ聖書協会とその他の多くの各国聖書協会を含む組織である聖書協会世界連盟（ＵＢＳ）は、伝道的働き、クリスチャンの一致のための祈

り、教会会議、組織に参加するようローマ・カトリックに奨励している。

ローマ・カトリックは、過去の歴史に見られるように聖書に対する愛はないはずだが、近年になって、神の言葉を推進しているように見える。しかし、それは聖書のみがクリスチャン信仰の土台であるという信仰、あるいは神の言葉に対する真の愛に基づいたものではない。読者をローマ・カトリックの教義に傾けるために、ローマ・カトリック訳になじませる『お手伝い』をするように５つのことが網羅されている：

１ 霊感を受けていない外典を加える。
２ 神のみ言葉の明瞭な意味を破壊するように多くの説明を入れる。
３ ローマ・カトリックの教義を読者に教えるコースを用意する。
４ 歪められたギリシア語の写本に基づいた聖書のみを使う。
５ 巧妙にカトリシズム（カトリック主義）を含んでいる聖書のみを承認する。

このようにして、プロテスタントはローマ・カトリック教会によって承認された聖書を配布する事を支持する時、彼らは知らず知らずのうちにカトリックの感化と権威を拡張する助けをして、神に忌み嫌われる非聖書的な教理をまき散らす助けをしているのである」（*Modern Bible Translations Unmasked,* p.99）。

アルバート・リヴェラ（元イエズス会士）はローマの腐敗した聖書による、プロテスタントへの侵入の策略について１９７９年に次のように言った：

「過去８０年間、オリゲンの腐敗した写本に基づいた英語訳聖書を我々は８１も持っている（現在は300と言われている）。これらすべては欽定訳をはじき出そうとする試みである。間もなくエキュメニカル聖書（全宗派共通の聖書）が反キリストに道を備えるために出されるであろう」（*Sabotage,* p.29）。

「１９６５年のバチカン第二公会議が『分離した兄弟たちと協調して』エキュメニカル聖書を出すことを承認してその道を開いた。１９６４年にすでに主だった聖書協会の会合ではプロテスタントとカトリック両方に受け入れられるヘブル語、ギリシア語の共通の底本を原語で出すことに同意した。それはプロテスタント側からの妥協さえ得られればいいのであった。なぜなら、ローマ・カトリックは外典を入れない聖書、公認本文から訳された聖書などは決して認めることができないからである。...

ローマ・カトリックはイタリアの司教、モンシグノー・アルバート・アブロンディのもとに、世界カトリック使徒会連盟（WCFBA）を組織した。...この組織のスポークスマンはこの事業について次のように言っている：

『この共同事業は相互の理解と見解をより深め、エキュメニカルなダイアログ（話し合い）に道を備えるために門戸を開く。ＷＣＦＢＡはただ単にこの聖書共同翻訳事業に関心があるだけでなく、将来のエキュメニズム事業に打ち込むのである』。これらの翻訳は『分裂していった教会の偏見を克服する助けになるであろう』。...

さらに不吉なことは、ラテンアメリカにおいてローマ教会の承認を得て配布される現代訳聖書は、プロテスタントの侵入に対抗する強力な武器とみられている。

『エキュメニカルの協力は、…１年間に１００万以上の聖書を配布することが含まれており、宗派に改宗させようとする反体制派の侵入を最小限度に押さえることに成功している』」（*Modern Bible Translations Unmasked*, p.100-102）。

ローマの協調姿勢は何を意味するか？我々のローマに対する柔軟さは何を意味するか？各国で、共同訳がいかに教会一致を成功させているかを述べて、スタンディッシュ博士らは我々にこう訴える：（黙示録3:8、18:4の警告を引用して）

「我々クリスチャンは神にとがめられている一致を推進する組織と提携するには遅すぎる地上歴史に存在している」と。

ローマは何百年の隔ての壁を打ち破り、対立から協調への姿勢を見せているが、実は彼らの巧妙な策略であることを知らなければならない。

「しかし一つの制度としてのローマ・カトリックは、この教会の歴史上のどの時代においてもそうであったように、今日でもキリストの福音と調和するものではない。プロテスタント教会は大いなる暗黒の中にある。そうでなければ、彼らは時のしるしを見分けるはずである。ローマ教会の計画や運営方式には遠大なものがある。この教会は、①再び世界を支配するために、②また迫害を復活させるために、③またプロテスタントが行なったすべてのことを無効にするために、激しい決定的な戦いの準備として、その感化力を広げ、その勢力を強めようと、あらゆる手段を用いている。…プロテスタントは法王制によけいな手出しをし、後援してきた。彼らは、法王教徒自身が見て驚き、理解しかねるような妥協と譲歩をしてきた。人々は法王制の真の性格、またこの教会が支配権を得たとき心配される危険に対して目を閉じている。政治的また宗教的自由に対するこの最も危険な敵の進出に反対するように、人々は目ざめる必要がある」（大争闘下 p.321,322 番号筆者）。

預言者の警告が聞こえるだろうか？法王教の主唱する自由、平等、博愛、一致、平和にだまされてはならない。「激しい決定的な戦いの準備として、その感化を広げ、その勢力を強めようと、あらゆる手段を用いている」のである。ローマ・カトリックは「時機を待っている」のである（大争闘下 p.339）。「有利な立場」が来た時に「手を下す」のである（大争闘下 p.341）。これほどはっきりと現代の預言者が警告しているのに、「ローマ・カトリックはもう昔と変わった」とか、「各時代の大争闘の本は書かれなければよかった」というような声を聞く。ホワイト夫人をか弱い１９世紀の女性として軽視するなら、天使ガブリエルが衝撃的な警告使命を持ってきても我々は耳を傾けないであろう。

カトリックに対してそんなにヒステリックにならなくてもいいじゃないかと言われ

るだろうか。カトリックは今になってルターをアウグスティヌスのように聖人に祭り上げている。彼の作った讃美歌「神はわがやぐら」もカトリック教会で歌わせるという。ルター自身に聞いてみよう：

「わたしは以前、法王はキリストの代理であると言った。今、わたしは、法王はキリストの敵であり、悪魔の使徒であると断言する」（大争闘上 p.179）。

プロテスタントの最後のとりでである我々の教会は、エキュメニズムに巻き込まれる危険はないだろうか？我が教会が金メダルを法王にプレゼントしたり、我が教会の最高学府の有名な教授がグレゴリアン大学院で論文を書いて、法王から金メダル、最高勲章をもらったりした。その本の推薦の言葉はイエズス会のヴィンセンゾ・モナチノによって書かれている。どうして我が教会はバチカンに公式に世界総会へオブザーバーとして招待状を出すのだろうか？そして代議員たちに紹介された時に大きな拍手喝采があがったとか？だれでも世界総会に来ることを拒むことはできない。しかし、公式にローマ・カトリック教会に招待状を出すことは何を意味するのだろう？

ルター

「法王教との距離を縮めるのは、背教している教会自身である」（サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1894 年 2 月 19 日）。

4世紀と20世紀

４世紀と２０世紀は非常に似ていることをスタンデイッシュ博士ら、オーストラリアのベテラン公衆伝道者であるジョージ・バーンサイド氏は指摘している。４世紀に、コンスタンティヌスが皇帝になり、名ばかりのキリスト教信者になる。その理由は当時衰えつつあった異教よりも、迫害に強く耐えてますます勢いを増していくキリスト教を利用した方が有利だと思ったからである。彼はそれを国教にする。この４世紀に異教とのエキュメニズム（一致運動）、改悪された聖書の普及（バチカン、シナイ写本の作成、カトリックのウルガタ聖書もこの時代に作られた）、日曜休業令が発布される。

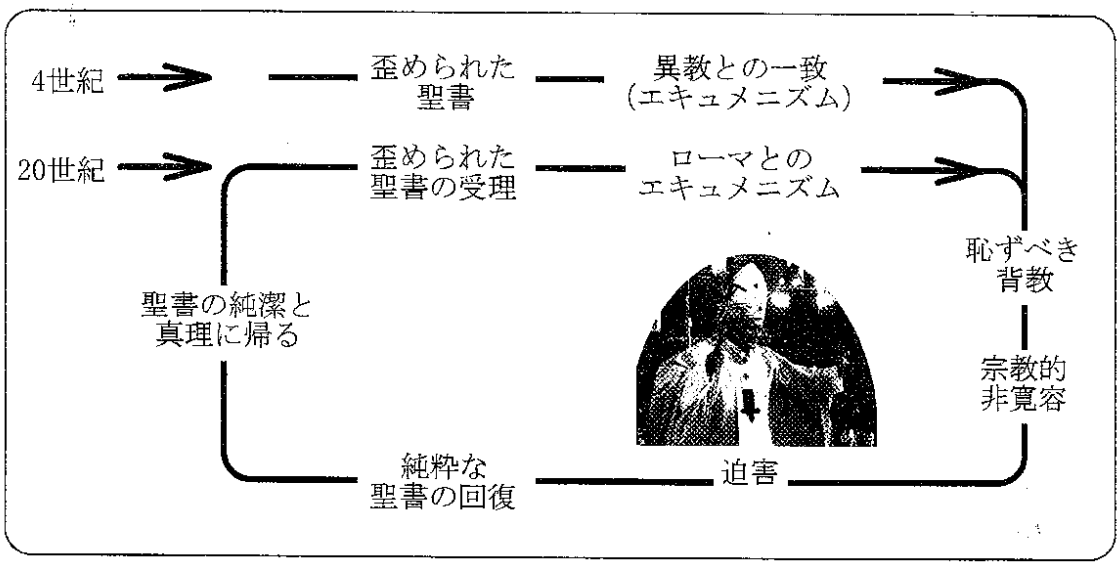
証の書はこう言っている：

「４世紀の初期に、コンスタンティヌス帝が名ばかりの改宗をして、一般から大いに歓迎された。…今や堕落（腐敗）は急速に進んだ。…この異教とキリスト教の妥協が、神に反抗して立ち上がると預言された『不法の者（罪の人）』を出現させることになった。…サタンの権力が生んだ一大傑作…サタンの代表者…」（大争闘上 p.44）。

２０世紀の今日、ローマの世界統一が熟する時代である。そのために接着剤である

宗教をまず一つにする。キリスト教をローマに再帰させるための手段として「愛と一致」「セレブレーション」「細胞グループ」「聖書の共同訳」が使われるという。だからある人は共同訳聖書のことを「エキュメニカル・バイブル」とも呼んでいる。４世紀に様々な異教の習慣が次々取り入れられ、初めて政教一致がなされ、その次は激しい迫害の矢が真のクリスチャンたちに向けられた。とするなら、２０世紀末の今日に起こっていることを見ると日曜休業令は非常に近いということを知るべきではないだろうか？

スタンデイッシュ博士は４世紀と２０世紀の似たようなサイクルを次のような図形であらわしている：



４世紀に歪められた聖書がエキュメニズム（教会一致運動）に導いていったように、２０世紀今日の歪められた聖書は、エキュメニズム（異教とキリスト教の合体）に導いていくことを知った。ローマの現在の寛容な態度は「戦いの準備」「迫害を復活させる」ことであることを覚えていなければならない（大争闘下 p.321）。

さて、１８世紀、１９世紀になって、原本に限りなく近い数多くの写本が発見された。本文研究家の熱心な努力によってほとんど原本に近い底本が作られ、それに基づいて各国の言葉に翻訳されてきた聖書は、１６世紀、１７世紀のものよりはるかに優れたものであると近代批評学者たちによって主張されるようになった。果たしてそれが真実であるかどうかを検討してみよう。そのためには、相対する二つの聖書写本の流れがあったことを知る必要がある。

聖書本文の二つの流れ

聖書の歴史、翻訳について調べると二種類の聖書写本がある事が分かる。そこでまず、聖書が聖書について述べていることを調べてみよう：

「神の変わることのない生ける神の御言(みことば)…主の言葉はとこしえに残る」（Ｉペテロ 1:23,24）。

「神の言葉はとこしえに変ることはない」（イザヤ 40:8）。

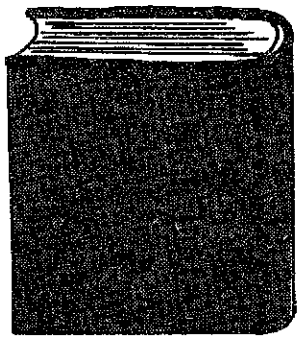
「天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない」（マタイ 24:35）。

「聖書は、すべて神の霊感を受けて書かれたものであって」（Ⅱテモテ 3:16）。

「神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」（マタイ 4:4）。

「神が仰せになった事は何一つ失ってはならない。わたしたちの永遠の救いに関する一つのみ言葉でも、おろそかにすべきではない。一言もむなしく地に落ちてはならないのである」（ミニストリー p.26）。

聖書は神の言葉を削ったり、付け加えたりしてはならないことを警告している。（黙示録 22:18,19 申命記 4:2 参照）



「神の言葉はみな真実（清い一欽定訳）である…その言葉に付け加えてはならない」（箴言 30:5,6）。

聖書は神の言葉は変わらない、永遠に残る、すべて霊感を受けて書かれたので、一つ一つ大事であることを教えている。故に人間が勝手に削除したり、付け足したりしてはならない。神の言葉は純潔であるので、人間の思想、哲学で改悪されてはならない。

主の僕は聖書を「権威ある、まちがいのない（無謬の）啓示」と言っている（大争闘下序 p.3、１ＳＭ p.416）。だから、各時代にわたって純粋に保たれ、継承される聖書がある事が分かる。

今日の食品には純正のものは、少なくなった。健康のためにといって健康食品界の良心的な人々は純正なものを保持するために懸命である。しかし、一方多くの人が、除去、精製、添加された食品の被害者となっている。我々の霊の食べ物も削除、変更、付

加されて改悪されている事実をどれだけの人が知っているだろう。聖書はその可能性、危険を予告していた。

「あなたがたは、むなしいだましごとの哲学で、人のとりこにされないように、気をつけなさい」（コロサイ 2:8）。

「あなたがたは生ける神…の言葉を曲げる者である」（エレミヤ 23:36）。

「神の言葉を改悪する」（Ⅱコリント 2:17 ―欽定訳）。

「だれがどんな事をしても、それにだまされてはならない。まず背教のことが起り、不法の者、すなわち、滅びの子が現れるにちがいない。…不法の秘密の力が、すでに働いているのである」（Ⅱテサロニケ 2:3,7）。

主の僕は次のように言っている：

「人間は神の決定を取り消す特別な自由が与えられたかのように行動する。高等批評家たちは神の立場に自分自身を置き、神の言葉を批評し、改訂したり、あるいは是認したりする」（*The Upward Look*, p.35）。

「わたしは、神が聖書を特別に守ってこられたことを示された。しかし聖書の数が少なかった時に、学者たちがそのことばを変えたことがあった」（初代文集 p.365）。

「それから、『常供の燔祭』（ディリー・サクリファイス）（ダニエル 8:12）の「燔祭」（サクリファイス）という言葉は、人間の知恵によって附加されたもので、本文にはないものであることをわたしは見た」（初代文集 p.155）。

「古文書が、修道士たちによって偽造された」（大争闘上 p.52）。

「４世紀の初期に、コンスタンティヌス帝が名ばかりの改宗をして、一般から大いに歓迎された。…今や堕落（腐敗）は急速に進んだ」（大争闘上 p44）。

証の書以外の文献を調べてみた。聖書と証の書が言っているとおり、使徒たちが眠りにつくや否や、真理の敵が聖書に手をつけた事実を知り、驚きを感じた。二つの聖書、二つの流れができていたことが明確となった。

共同訳聖書の真実を知るためには、原点に戻ってみなければならない。原点とは言っても、預言者、使徒たちが書いた原本は一つも残っていない。そのわけは数回にわたってアンカーや別冊で書いたので、省かせていただく。聖書が写字生によって写されることが何度か繰り返されて後は、完全に廃棄されたのである。その写本が残っているだけである。聖書の写しは迷信と思えるほど綿密な方法でなされた。特にシリアのアンテオケはそのセンターとなった。ここで初めてキリスト信者はクリスチャンと呼ばれるようになった。ここから純粋な聖書を持って宣教師たちが各地へ送られていったのである。

ところが、一方エジプトのアレキサンド

リアでは、グノーシス、ギリシア哲学の影響を受けた聖書が作られていく。シリア、アンテオケの方は東方の流れとなっていき、アレキサンドリアーローマの方は西方の流れとなっていく。

二つのライバルの聖書本文とは、「公認本文（Textus Receptus）」＝東方の聖書テキストとバチカンーシナイ写本＝西方の聖書テキストである。イエズス会の憎む欽定訳、再臨運動を生んだ聖書本文は公認本文であった。「公認本文」と呼ばれるのは１６世紀になってエセフィルの時からである。しかし、その源流はどこかというと、「使徒教会にさかのぼる」とウィルキンソン博士は言う。

公認本文の系統は、みな西方の腐敗を免れ純潔を保っていたことは驚くべきことである。最初、その流れは両者大差はないかのように見えるが、中世時代になるとその差は大きくなり、不純なものは、純正のものを憎み、迫害する。しかし、１８４４年になってバチカン写本がバチカンの図書館から取り出され、シナイ写本がシナイの修道院のゴミ箱からドイツの神学者によって発見されてから、近代批評学者たちは原本に近いより良い聖書は、バチカンの施設にあったと人々に思わせることに成功した。

改悪聖書の歴史、流れ

では、どのように聖書が改悪されていったか、その流れをごく簡単に見ることにしよう。

１世紀の終わりから２世紀には早くも約８０の異端グループがいたそうだ。パウロの警告する「偽りの知識（学問ー欽定訳）」があった（Ｉテモテ６：20）。たとえば、グノーシス派、ニコライ派、モンタノシス派、アリウス派（エホバの証者に継がれる）、ネストリウス派、ドナトウス派、マニ教、サベリウス派、等々…。聖書改悪に特にきわだった役割を果たすのが、①ユスティヌス、②タティアン、③アレキサンドリアのクレメント、④オリゲンである（Which Bible, p191）。

最後の弟子ヨハネが死去した年、紀元１００年にユスティヌスが生まれる。彼によって始まった聖書改悪は、その門下生へと次々受け継がれ、オリゲンの時、最も大胆な改悪がなされる（Burgon, *The Revision Revised,* p.336）。オリゲンもユーセビウスも聖書を改悪したことを認めている。オリゲンは「聖書は、書かれたまま理解する者にはほとんど役に立たない」と言っている（*Which Bible,* p.192）。

聖書が改悪された一つの例をアドベンチスト・ライフ１９９６年４月号より挙げてみよう：

「サタンはまず神のアガペーの愛に攻撃の焦点をしぼった。使徒たちが舞台から消えると、キリスト教会の指導権は教会の『聖職者』の手に握られた。彼らのほとんどはギリシア出身で、新約聖書の著者が、意味のよくわからないアガペーを取り入れ、ギリシア人が最高の愛とみなしているプラトンの『天のエロス』を無視したことに屈辱を感じた。彼らは、イエスの弟子は（ルカを除いては）みなユダヤ人であったために、ギリシア語がよく分からなかった。従って聖書は修正する必要があると感じた。「マルキオンが

最初に変更を試みた。次にオリゲンは実際にヨハネの述べた『神は愛（アガペー）である』を『神は愛（エロス）である』に変更した」（ジャック・セクエラ牧師：福音のカ p.7)。

４世紀に入って、コンスタンティヌス帝はユーセビウス司教に至急５０の新約聖書を準備するよう依頼した。ユーセビウスは改悪された西方の聖書を選んで提供した。その中の二つがバチカン－シナイ写本であったといわれている。オリゲンに続いて、ヒエロニムスがラテン語のウルガタ聖書を作る。これは「多くの誤りを含むラテン語訳」であったと預言の霊も言っている（大争闘上 p.309)。

暗黒時代の間、聖書はラテン語で書かれたものが支配的で、一般人には読まれなかった。宗教改革が聖書の翻訳と共にやってくる。

ティンダル

１４世紀に「宗教改革の明星」、ウィクリフが聖書をはじめて英語に翻訳するが、それは「多くの誤りを含むラテン語訳からの翻訳であった」（大争闘上３０９)。やがてエラスムスがはじめてオリジナルのギリシア語の聖書を出版する。これはあの「公認本文」の東方の流れの聖書であった。これがローマの怒りを買うのである。ティンダルはそのギリシア語聖書によって英語に、ルターはドイツ語に、オリヴェタンはフランス語に、デイオダテイスはイタリア語に翻訳し、宗教改革の聖書となる。

カトリックのイエズス会はそれを阻止するために、１５４５年、トレント会議を召集する。目的は、プロテスタントの広がりをどう阻止するかの戦略を打ち出すことであった。ローマ・カトリックも聖書のみを信仰の基準と唱えたらどうかという意見も出た。そうすればプロテスタントをおびき寄せることができるのではないかと考える人もいた。しかし、イエズス会はプロテスタントの「聖書のみ」を覆すためにローマ・カトリック教会の権威は伝統であることを確認した上で、彼らはラテン語ウルガタ聖書と、あるところは原語の聖書も参照しながら、聖書を英語に翻訳する。それがドウエーレイムス聖書である。激しい聖書の闘争は依然として続く。

１６１１年、プロテスタントの英語聖書の傑作、欽定訳が出版される。ローマにとってはこれは抵抗しがたい武器となった。

しかし、イエズス会は忍耐強く働き続ける。１８３３年、イエズス会はイギリスの聖公会に侵入し、オックスフォード運動が起こる。この運動の第一人者であったニューマン博士は、宗教改革以来、イギリスの宗教界に最も影響を与えた人物であった。彼は、プロテスタントはカトリックへの反逆であったとして、聖公会の教義をカトリックに近づけた。マリア崇拝、告白、ミサ、様々な儀式、習慣が入ってきた。後に彼はカトリックの枢機卿となる。彼は欽定訳をこき下ろした。

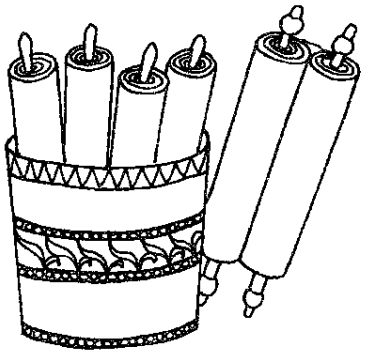
１８７０年、カンタベリー大司教は欽定訳を改訳する委員会を召集する。その中にオックスフォード運動の大きな影響を受けた、最も影響力のある二人の学者がいた。ウエストコットとホルトである。彼らは、その圧倒的な影響力で、今までの「公認本文」聖書を退け、西方の写本、つまりバチカン－シナイ写本にすり替えることに成功した。ワルデンセス、荒野の教会、宗教改革、再臨運動を導いた「公認本文」を劣等なものと嘲笑し、公認本文を全面的に否定し、バチカン－シナイ写本を最良のものとしたのである。この二人の学者は進化論を信じ、マリヤ崇拝者で、心霊術信者であったといわれている。彼らの作品がＲＶ（改訳聖書）である。

ホルト曰く：「あの下劣で、最悪な公認本文はだめだよ」（*Which Bible,* p.290）。

＊現在、英語圏で最も人気のある聖書の一つ、NIV（新国際訳）は、バチカン写本とシナイ写本のことを「二つの最も信頼できる写本」としている。

学者たちが聖書を翻訳するときには、近代本文批評学者はすでに存在するヘブル語、ギリシア語のテキスト（本文）からどれを底本とするか選ばなければならない。さもなければ自分でテキストを作るかしなければならない。ウエストコット－ホルトはバチカン－シナイ写本に基づいて自分たちのギリシア語テキストを作ったのである。

以来次々と聖書の翻訳ができていった。２０世紀の後半、あからさまにバチカン－シナイ写本そして２世紀のパピルス写本を高揚し、原本に最も近い写本による「より良い聖書」と各国で合唱するようになった。ローマのエキュメニカル運動の完熟する時期が来たのであろう。プロテスタント最後の砦であるセブンスデー・アドベンチストへの、イエズス会の最後の攻撃が展開されつつある。



新共同訳の底本

新共同訳の底本は「最高水準の底本」と言われている。

旧約聖書の底本は「ビブリア・ヘブライカ・シュトットガルテンシア」となっている。学者間で論争されてきたのは、新約の底本のことであった。マソラ本文に信頼を置いているときは、旧約は問題ないものとされていたが、２０世紀になって近代本文批評学はこれを放棄し、変更されてきていることがわかる。

新共同訳の新約の底本は、聖書協会世界連盟（UBS）の校訂本を使っている。学者が何度も校訂に校訂を重ねてきている。その先をたどってみると、ネストレ－アーランド学者たちの校訂版、さらにさかのぼってみるとウエストコット－ホルトらのギリシア語底本にたどりつく。彼らは結局１８８１年までヨーロッパで公認されてきた「ビザンチン写本」「公認本文」を放棄し、バチ

カンーシナイ写本に乗り換えたのである。使徒、ワルデンセスたちの純粋な神の言葉から改悪された写本に変えていったのである。

近代批評学の主張を吟味

ここで、我が教会が共同訳を擁護しているのは近代批評学に立っているのであって、聖書と預言の霊の立場から判断していないことが分かる。

安息日学校教課１９９６年１期ｐ．３０、アドベンチスト・ライフ９６年２月号、９４年１２月号、その他牧師会から出されている印刷物はみな繰り返し、繰り返し、１９世紀までの公認本文を劣等なものとして完全否定し、近代批評学の立場から共同訳を擁護しているのである。近代批評学は欽定訳をさげすみ、ワルデンセスのことは言及しないか、曲げて伝えている。エラスムスを嘲笑し、公認本文を劣等とする。そしてバチカンーシナイ写本、パピルス写本を高揚する。

バチカンーシナイ写本について

そんなに近代批評学者たちによって高く評価されているバチカンーシナイ写本は一体どんなものなのか？

バチカン写本は公認本文から２８７７のことばを取り除き、５３６の言葉を付け足し、９３５の置き換え、２０９８の移動、１１３２の修飾があり、合計７５７８の食い違いがあるとギリシア語の勤勉な学者、フィリップ・マーローは指摘している（*Modern Bible Translations Unmasked*, p.10）。シナイ写本はさらに悪く、９０００の食い違いがある（G.Burnside, *NIV or KJV*, p.163）。

バチカン写本とシナイ写本との間にも３０００の食い違いがある。シナイ写本は５００年間に２０人から３０人の写字者たちによって修正、改訂がなされた（*Modern Bible Translations Unmasked*, p.127 参照）。

きわめて不注意な写しがなされ、多くの間違ったつづりが見られる。バチカン写本には黙示録がなかったという。マルコ１６：９～２０（キリストの弟子たちへの宣教命令）、ヨハネ７：５３～８：１１（姦淫の女）がない。創世記１：１～４６：２８までない。詩篇１０６～１３８篇までない。ほとんどのパウロの書簡がない。ヘブル９：１４以降がない。これがバチカン写本なのである（*NIV or KJV*, p.159）。

純粋な聖書の継承

では、純粋な神の言葉はどのように継承され、保管されてきたかを見てみよう：

まず、「おきてと証に求め」（イザヤ８：２０）てみよう：

聖書は黙示録１１章、１２章には１２６０年の暗黒時代、旧約、新約聖書は迫害の中にも、人目に付かない「荒野」にいて、忠実に証し続けていったと描写されている。

預言の霊の証：

「しかし、わたしは、神が神のみ言葉を特別に保護されるのを見た。…神のみ言葉が失われるのをお許しにならなかった」（初代文集 p.356）。

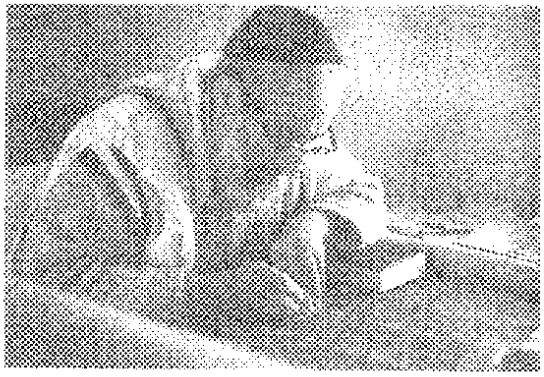
「ワルド派（ワルデンセス）の人々は、ヨーロッパにおいて最初に聖書の翻訳を手にした人々の一つであった。宗教改革の数百年も前から、彼らは、自国語で書かれた聖書の写本を持っていた。彼らは混ぜ物のない真理を持っており、そのために、特に憎しみと迫害とを受けたのであった。彼らは、ローマの教会は背教したバビロンであると宣言し、生命の危険をもかえりみず、その腐敗に抵抗するために立ち上がった。…そびえ立つ山々のかげに…ワルド派は隠れ場を見いだした。そしてここで真理の光が、中世の暗黒のただ中にあって燃え続けた。ここで、千年以上もの間、真理の証人たちは昔ながらの信仰を保持したのであった」（大争闘上 p.65,66）。

「彼らはまた、聖書の写本に従事した。聖書全体の写本もあれば、短い部分的なものもあり、それには、聖書の解説ができる人々による簡単な聖句の説明がついていた。こうして、神よりも自分たちを高めようとする人々によって長く隠されていた真理の宝が明らかにされた。

忍耐強くたゆまぬ努力によって、時には暗い洞窟の奥深くで、たいまつの光をたよりに、聖書は一節ずつ、また一章ずつ書き写されていった」（大争闘上 69）。

「幾世紀にもわたってワルド派のキリスト者たちが信じ、教えてきた信仰は、ローマから出た偽りの教義と著しい対照をなしていた。彼らの宗教的信念は、キリスト教の真の体系である書かれた神の言葉に基づいていた。…そぼくな農民たちは、自分自身の力で、背信した教会の教義や邪説に反対する真理に到達したのではなかった。彼らの信仰は、新たに受けた信仰ではなかった。彼らの宗教的信念は、彼らの先祖から受け継いだものであった。彼らは、使徒時代の教会の信仰、すなわち、『ひとたび伝えられた信仰』を強く主張した（ユダ 3）。世界的な大都市に王座をかまえた高慢な法王制ではなくて、この『荒野の教会』がキリストの真の教会であり、世界に伝えるために神がご自分の民にゆだねられた真理の宝の保管者であった」（大争闘上 p.64）。

ワルデンセスばかりではなかったが、彼らは「最も著しい」グループであった（大争闘上 p.62）。イギリス、スコットランド、アイルランド、ドイツ、スペイン、フランスにもいたのである。



「大ブリテンでは、原始キリスト教が早くから根を下ろしていた。最初の２、３世紀にブリトン人たちが受けた福音はまだローマの背教によって腐敗してはいなかった。この遠方の国にまで及んだ異教の皇帝たちによる迫害は、ブリテンの初期の教会がローマから受けた唯一の贈り物であった」（大争闘上 p.60）。

歴史学者らの証言：「公認本文」聖書は

「使徒教会にさかのぼり、各時代の賢明な信者たちに折々再現される。それはいろいろな局面において純潔な教会の知恵と学問によって守られてきた。たとえば、紀元７０年、ローマがエルサレムを崩壊させたとき、クリスチャンたちが逃げていったパレスチナのペラの教会によって、優秀な学者を出したアンテオケのシリア教会によって、北イタリアのイタリック教会によって、同時に南フランスのゴーリック教会によって、イギリスのケルチック教会によって、前ワルデンセスによって、ワルデンセスによって、そして宗教改革の教会によって守られてきたのである」（Wilkinson, *Our Authorized Bible Vindicated,* p.12）。

はっきりしているではないか。使徒たちから純粋な聖書を継承し、保管したのは、ローマが言うようにローマ・カトリック教会ではない。純粋な真理はローマから来たのではない。ローマの聖書、ウルガタができたのは紀元３８０年であった。それ以来ローマ・カトリックの聖書は「ギリシア語からでなく、ウルガタから翻訳されなければならない」とされている。（ドウエー聖書の序論ｐ.VII）。バチカン－シナイ写本も４世紀の腐敗した写本である。これが今日の近代批評学者たちによって崇められている写本なのである。だから真理の敵は、ワルデンセスのことについて一切言及しないか、または彼らについての事実をあまりにも曲げて伝えているのである。

ワルデンセスについて

彼らが使徒たちからのオリジナルの聖書を継承したというのは間違っている、彼らの使っていた聖書はウルガタ聖書（カトリックの聖書）そのものであると近代批評学者は言う。

不思議なことに、英和辞典でも、聖書翻訳に関する日本語の本でも筆者の調べた限りにおいては、ワルデンセスあるいはワルド派とはピーター・ワルドーが１２世紀に創立したとある。黙示録１１：２～６、１２：６,１４によると真の教会はローマの迫害を逃れて１２６０年の間荒野（人目につかない状態）に逃げる。その間、生ける神のみ言葉は絶えることなく、証し続けるのである。彼らが使徒たちの真理を継承し、保管していたことを霊感の書と歴史家の証言で知ることができる。

「ワルデンセスの始まりを1175年に働きを始めたピーター・ワルド（Peter Waldo）とする現代の著者たちがいるが、それは間違いである。この人々の歴史的な名前は、正しくは彼らが住んでいた谷間、ヴォウドー（Vaoudois）からとられたのである。しかし、彼らの敵はワルデンセスの起源をワルドーからとしたのである。...にもかかわらずワルデンセス、あるいはヴォウドーの歴史はワルドーの何世紀も前から始まっているのである。...宗教改革者たちはワルデンセスの教会は紀元120年につくられ、使徒たちから受け継いだ教えを子々孫々伝えていったと考えた。古代イタリア人の、ラテン語聖書は遅

くとも紀元157年にはギリシア語から翻訳されていたのである」(*Our Authorized Bible Vindicated*, p.34,35)。

「『最も初期のころ、翻訳はアラム語、あるいはシリア語からラテン語に、そして後にギリシア語からラテン語に訳されたに違いない。このようにイタリア教会とシリア教会(アンテオケ)との連結がなされ、この二つの国の間に共通する基礎がすえられ、その後も、長い間影響を与えたように思われる』Burgon and Miller, *Traditional Text*, p.145」(Wilkinson, *Ansers to Objections*, p.79)。

ホワイト夫人は、「彼らの信仰は…彼らの先祖から受け継いだものであった。彼らは、使徒時代の教会の信仰、すなわち、『ひとたび伝えられた信仰』(ユダ3)を強く主張した」(大争闘上 p.64)と言っている。

「最初クリスチャンと信者が呼ばれたのは、シリアの首都アンテオケであった。…聖書は紀元１５０年に、原語からシリア語に訳されたと一般的に認められている。これがペシトー(正しい、単純)として知られているものである。ある権威者曰く:『そのペシトーは、…ネストリアン(景教)によって使用されてきたことが分かる』」(*Our Authorized Bible Vindicated*, p.197)。

ネストリアン(景教)=ユダヤ人クリスチャンたちは、シリアから、ずっとインド、支那まで純粋な真理を持っていったと言われている。景教が支那で優遇されていた時、弘法大師(空海)はそこで大きな影響を受けたらしい(Wilkinson,*Truth Triumphant*, p.371-373参照)。

シリア語ペシトーからイタリアのワルデンセスの持っていた聖書、ラテン語の「イタラ」(Itala)に訳されたのであった。

「『ヴォウドー(ワルデンセス)こそ宗教改革の教会と我らが救い主の弟子たちとをつなぐ鎖である』Muston,Vol.1, p.29」(*Answers to Objections*, p.79)。

使徒たちのオリジナルからの直接の写本はワルデンセスが持っていたのである。決してローマ・カトリック教会が「最も信頼できる写本」を持っていたのではない。

批評家たちは、ワルデンセスが持っていた聖書はカトリック・ウルガタ聖書であったというが、そんなことはあり得ない。もしそうなら、彼らがローマ・カトリックから憎まれ、迫害されるはずがない。預言の霊は、ウルガタ聖書は「多くの誤りを含むラテン語訳」と言っている。(大争闘上 p.309)。ワルデンセスの聖書は「混ぜ物のない真理を持っており、そのために、特に憎しみと迫害とを受けたのであった」(大争闘上 p.65)。

エラスムスについて

ワルデンセスが人里離れたところから、真理を証し続けている間、ヨーロッパは暗黒時代で、一般人は聖書を読むことができなかった。神はエラスムスを選ばれて純粋な真理をオリジナルのギリシア語で復元させられるのである。

「１５１６年、すなわち、ルターの９５か条の論題が公にされる前年、エラスムスは、ギリシア語とラテン語の新約聖書を出版した。神の言葉が原語で出版されたのは、これが初めてであった。この事業によって、以前の訳の多くの誤りが正され、意味も明瞭になった。これによって、多くの知識人たちが真理をよく知るようになり、改革事業に新たな刺激を与えた。…ティンダルは、ウィクリフの事業を完成して、同胞に聖書を与えるのであった。…彼は、エラスムスのギリシア語新約聖書によって、福音を受け入れた」（大争闘上 p.309,310）。

近代批評学者らはエラスムスを嘲笑するのが慣例

我が教会の歴史家であり、ワシントン・ミッショナリー・カレッジの学長であったベンジャミン・ウイルキンソン博士を引用しよう：※（彼の学者、研究家としての手腕が、時の米国国務長官のコーデル・ハルに高く評価されたといわれている。彼の著書「真理は勝利する」「我らが欽定訳を擁護する」ほど各時代の真実な神の民とイエズス会の戦いを如実に書き表しているものはないといわれている）。

「今日でさえ、公認本文（Received Text）の純粋な教えに敵意を持っている者はエラスムスをも嘲笑するのが慣例になっている。事実を過小評価するのは彼の働きをあまりにも過小評価することにほかならない」（*Our Authorized Bible Vindicated*, p.225）。

彼は普通の学者が10時間かけてする仕事量を1時間でこなしてしまうほどの偉才の学者であったと言われている。「エラスムスが卵を産み、ルターがそれを孵化した」ということわざもある。

「彼の存命中、ヨーロッパは彼の前に心服していた。英国王は国内でどんな地位でも、また彼の望むがままの報酬を提供した。ドイツの皇帝も同じ様な提供をした。法王は彼を枢機卿にしようとした。彼は妥協せずきっぱりと断った。事実、彼は自分さえその気になれば、恐らく法王にもなれたであろう。フランスとスペインは彼に自分たちの国民になるように勧めた。オランダは彼を最も名誉ある市民として迎えようとした」（*Our Authorized Bible Vindicated* p.53）。

「エラスムスは完全な写本を入手できず、12世紀の不十分な写本に依拠」（ライフ1996年2月号、p.14）していると非難される。しかし、ウイルキンソン教授は言う：

「エラスムスは何百というたくさんの写本を調べたが、使ったのはわずかのものであった。どうしてか？山積するギリシア語の写本は実際はどれも公認本文（Received Text）であったからである」

（*Our Authorized Bible Vindicated* p.53）。

彼はたくさんの写本を二つに分類した。公認本文（Received Text）に属するものとバチカン写本に類するものとに分け、公認本文を純粋なものとして他を拒絶したのである。

「さらに、彼が選んだ本文は、ギリシア、シリア、ワルデンセス教会の中に顕著な歴史を持ち、神の摂理の証明に抵抗しがたい議論を与えている。神は何百という聖書を書かれたわけではなかった。たった一つの聖書があるだけである。他はいいものであっても似通っている程度のものである。つまり、（Received Text）＝公認本文と言われているエラスムスのギリシア語は、敵の異教、法王教ローマの怒りを耐えてきたギリシア語の聖書以外の何ものでもない」（同上 p.54）。

彼はウルガタ聖書を使ったか？

そのことについて間違った情報が広まっている。ウイルキンソン博士曰く：「エラスムスは５版も発行した。第５版にはカトリックのウルガタ聖書はなかった。しかし、第４版はエラスムスの狙いが含まれていた。それには二つでなく、三つのコラム（欄）があった。① ギリシア語新約聖書、② カトリック・ウルガタ聖書、そして③ エラスムスによって改訂されたカトリック・ウルガタ聖書であった」

（*Answers to Objections,* p.43,44）。

彼のこの第三のコラムがヨーロッパ全体に旋風を起こしたのである。つまり、それがカトリックの最も信頼する聖書に痛烈な批判を浴びせたからである。

続いてステファヌス、ベザ、エセフィルという偉大な学者らはその公認本文を「確立し、固めた」のであった。それがヨーロッパ宗教改革者たちの聖書翻訳の基になるのである（Standish p.124. 参照）。

彼は広範囲にわたって旅行もして、世界のいくつもの大図書館を探り調べた。しかし、プロテスタントからはよく思われない。なぜならカトリックにとどまって改革をしようとしたからである。ホワイト夫人は彼は、学問的には非常に優れていたが、臆病で、迎合的で、真理のためには生命も栄誉も捨てるという道徳的偉大さに欠けていたと書いている（大争闘上 p.271,212 参照）。

彼はローマとも交信した。しかし、バチカン写本は信頼に価しないものとして一切使用しなかったのである（P.Green, Interlinear Greek-English N.T. Preface,P.xii quoted in *The SDA Bible,* by Gar Baybrook）。

また、彼はカトリックからも嫌われていた。なぜなら、彼は私生児であり、カトリックの聖職者の不義を容赦なく暴露、指摘して次々本を書いたことと、プロテスタントに同情していたからである。しかし、彼が聖書を回復することに貢献したことを、預言の霊は次のように言っている：

「エラスムスは、ギリシア語とラテン語の新約聖書を出版した。神の言葉が原語で印刷されたのはこれが初めてであった」（大争闘上 p.309）。

ところが、批評家たちは何というか？

エラスムスのギリシア語聖書を攻撃し、

弱体化し、転覆、傷つけることをねらうイグナチウス・ロヨラについてウイルキンソン博士は次のように言っている：

「イグナチウス・ロヨラは法王のところにやってきてこの様な要旨を言ったに違いない：『聖アウグスティヌス会には黙想の好きな人たちに修道院を提供する仕事を続けさせてください。ベネデイクト修道会には文学上の分野で献身させてください。ドミニコ会には宗教裁判の責任を任せてください。しかし、我々イエズス会は、大学や、大学院を攻略しましょう。法律、医学、科学、教育機関を支配するようにし、ローマ・カトリシズムに損傷を与える本であれ、何であれ根こそぎ取り払うようにしましょう。我々は青年たちの思想、アイデアを形づくりましょう。我々自らいろいろなプロテスタント宗派の説教者となり、大学の教授となり、なまいきにも伝統に逆らおうとするエラスムスのギリシア語新約と、旧約の聖書作品の権威を壊しましょう。そうすればプロテスタント宗教改革をつき崩すことができるでしょう』」（*Our Authorized Bible Vindicated,* p.60）（大争闘上 p293,294 参照）。

「教育はヨーロッパとアメリカの伝道地において、イエズス会の最も大切な職業である」（*Encyclopedia Britannica,* 1963 ed, Article Society of Jesus）。

イエズス会は公認本文系の翻訳聖書に対抗し、トレント会議において、ウルガタ聖書を元にして英語のドウエーーレイムス聖書を１５８２年に出版する。

欽定訳

ローマ・カトリックは、イギリスをカトリック化するために強力な手段に出た。ジェームス王一世はそれに対抗して英語の純粋な聖書を作る必要を感じた。

エラスムスのギリシア語底本、いくつかのワルド派系統の聖書そしてティンダルの文学的に優れた聖書を片手に、４７人の学者たちによって１６１１年版の欽定訳聖書ができたのである。彼らはアレキサンドリアでオリゲンが手がけた旧、新約聖書を拒んだ。その聖書はあまりにも改悪されていたからである。彼らが拒んだ聖書は他にもあった。ローマ・カトリックのラテン語ウルガタとドウエーーレイムス聖書、ギリシア語７０人訳（旧約）であった。

欽定訳の翻訳者たちは顕著な学者たちであったうえに霊的にも誠実で清廉な人たちであった。この企画の総会長のランセロット・アンドリュースは彼の時代の最も優れた言語学者であった。毎日５時間は祈りに費やし、疑いなく、敬虔な信心深い人であった。普段横柄なジェームス王でさえ彼を非常に尊敬していたのである。み言葉の霊感を尊重していた。その上、聖書のどの部分に

関しても一人の人が過度に影響を及ぼすことのないように監修されていた。作業の各部分が最低１４回は綿密に再検討されたのである。

欽定訳聖書は美しさといい、学問的にも他に比類のないものである。ローマにとってはこれは抵抗しがたい武器となった。

ワルデンセス⇒エラスムス⇒宗教改革者⇒欽定訳⇒再臨運動⇒セブンスデー・アドベンチストへと真理のみ言葉はバトンタッチされたのである。１８４４年頃まで証し続けたワルデンセス教徒の生き残りはついにローマとの妥協を余儀なくされた。しかし、ちょうどその頃真理のトーチを受け継ぐべく「女の残りの子ら」を用意されていた。わが教団が出版したことのある聖書は欽定訳であった。

欽定訳を擁護する人たちには、欽定訳だけと主張する者と、欽定訳にも不十分なところもあると認めながらも、今のところ翻訳としては最も正確であるとする者がいるようである。「我らが欽定訳を擁護する」を書いた我が教会のウイルキンソン博士も、一般に知られるバーゴン博士も後者である。

スタンデイッシュ博士らも欽定訳よりもよい翻訳が出たらそれに換えると言っている。

「我々が欽定訳を掲げるのは、それが霊感を受けた、完全な翻訳だからではない。我々が欽定訳を勧めるのは、それが覚えやすいとか、その言葉づかいが神聖であるとか、律動的であるからという理由ではない。欽定訳を主として教会でも個人にも勧めるのは、英語の世界でそれが、最も正確で、信頼される翻訳だからである。もっと正確な、偏見の入っていない翻訳が上質な現代語で出てくるのであれば、我々はそれを勧める人たちに直ちに加わるであろう」（*Modern Bible Translations Unmasked,* p.26）。

たとえば、欽定訳でもヘブル書の聖所、至聖所の訳が間違っているところがあることが指摘されている。

The 1611 version of the English Bible was authorized by King James I, right.

ホワイト夫人の違った聖書翻訳の使い方

ホワイト夫人もいろいろな現代訳を用いられたのではないかとよく言われる。たいていはそれだけで現代訳を用いる理由にしている。しかし、ホワイト夫人が欽定訳以外の現代訳を用いられたように用いるなら、問題はない。証の書の索引が三巻あるが、それによると２５冊の証の書に聖句が１５,１１７も引用されている。その９５％は欽定訳聖書からであり、他のすべての訳を合わせても５％にすぎない。彼女の最後の二つの著作は、教会への証９巻と国と指導者であった。その中では欽定訳しか用いていない。他の訳で最も良く用いられたのは、ＲＶ（改訳聖書）とＡＲＶ（米国改訳聖書）であった。

その他の訳（Rothernham, Basic, Boothroyd, Bernard, Westminter, Lamsar）からはそれぞれ一回ずつしか引用していない。

どのような場合に欽定訳以外の聖書翻訳を用いられたか？真理、思想に誤りがなく、表現が分かりやすいときだけ用いられた。誤りがある場合には決して用いられなかった。Ｗ.Ｃ.ホワイトは、ホワイト夫人は説教のときには決して欽定訳以外は用いられなかったと証している。違った訳だと混乱をもたらすからと（*Modern Bible Translations Unmasked, NIV or KJV* よりのまとめ）。

彼女自身の説明：

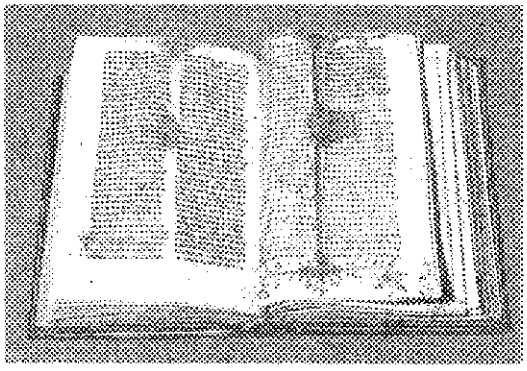
「会衆には欽定訳で聖句を覚えている人たちがたくさんいる。改訳聖書で読むと彼らの心に、なぜ改訳者たちによって変えられたのか、なぜ説教者たちによってそれが使われるのかなどと混乱させ、疑問を持たせる。彼女は私にＡＲＶ（米改訳聖書）を使うなとは積極的に言わなかったが、違った言葉を使うと、会衆の年老いた者たちに混乱をもたらすから、かなりはっきりそうしない方がいいとほのめかしてくれた」（E.G.White Document File No.579, *Ministry*, April, 1947, p.17,18）。

「忘れてならないことは、ＮＩＶ（英語の現代訳聖書）にある聖句で、欽定訳に見つけられない聖句というものは一つもない。しかし、ＮＩＶ（新国際訳）には本当の神の言葉がたくさん削除されているのである。…現代訳で、誤りがなく、思想がよりはっきりしていると思われるときに、ホワイト夫人はそれを引用されたが、誤りを含んでいる場合には決して引用されなかった」（*NIV or KJV,* p.49）。

彼女は真理のみ言葉は純粋に使徒たちから、ワルデンセスへ、エラスムスへ、宗教改革者たちへ、そして欽定訳によって再臨運動へと継承されたことを信じていたのである。

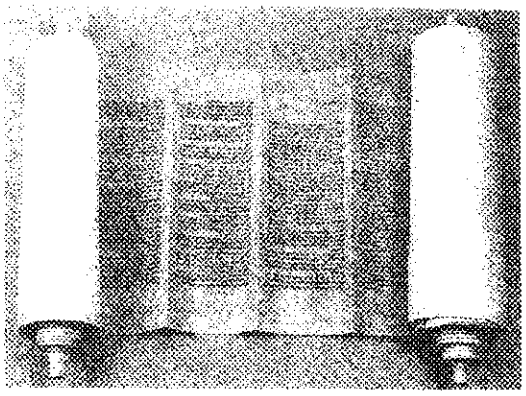
「しかし主は、ご自分の奇跡的な力によって、聖書を現在の形に保ってくださいました」（セレクテッド・メッセージ１巻 p.4）。

「現在の形の聖書」とは、ホワイト夫人の使っておられた欽定訳聖書である。バチカンーシナイ写本にも奇跡的に守られてきたと適用されるだろうか？シナイ写本はごみ箱に捨てられているところをティッシェンドルフに見つけられたが、それを奇跡と呼んだとしても、それ以外何の反対迫害にもあってはいない。しかし、公認本文に対するローマの敵意は恐ろしいものであった。ワルデンセスは「混ぜ物のない真理を持っており、そのために、特に憎しみと迫害とを受けた」（大争闘上 p.65）のである。どれほどの聖書が焼かれたことか。幾たびそれが繰り返されたことか？ティンダルが焼かれて殉教したのはエラスムスの聖書の故であった。



聖書本文について(その他のこと)

マソラ本文は旧約の写本として、問題ないものとして扱われてきた。特に死海写本が発見されてその信憑性は確立された(Gerhard. Hasel, Understanding the Living Word of God,p. 92,93)。本文学で論争になっていたのは新約聖書の本文であったのだが、「２０世紀になって、近代本文批評学の学問的成果をとりいれて、『公認本文』を合成マソラ本文として放棄し」たことを知って筆者は驚いた。



確かに旧約聖書にも近代批評学は手を加えていることが分かる。というのは①近代本文学の歴史を見ると分かるし、②旧約聖書を比較しても変更がなされていることが分かるが、特に新共同訳になってから顕著になっている。

神の知恵と力と愛を証しするところの自然に、進化論が挑戦してきた１８４０年代のほぼ同じ時期に、神の啓示である聖書に高等批評学が挑戦してきたのは興味深い。

「学問の成果によって」とよく言われる。進化論に対抗して創造論を擁護する学者が少数ではあってもいるように、近代批評学に対抗して公認本文、欽定訳を擁護する優秀な学者たちがいることを忘れてはならない。公認本文の擁護者のチャンピオン、バーゴン博士は、ウエストコットーホルトを激しく非難した。４５ヶ国語をマスターした無比の学者ロバート・ウイルソンも聖書のために戦った学者であった。彼は破壊的な現代の学問は弁護の余地がないと「高等批評学は学問か？」に書いている。大衆が科学ぶった進化論で洗脳されるように、我々も学問という名の下にマインド・コントロールされる恐れがある。(大争闘下 p.361 参照)。

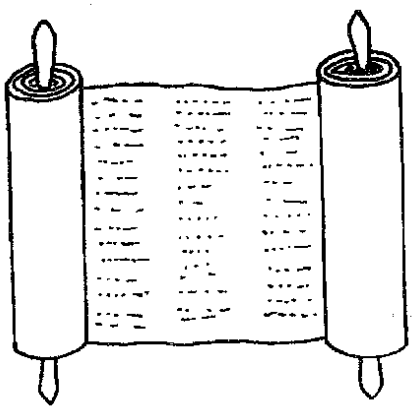
確かに１９世紀になって多くの写本が発見された。

「しかし、強調されなければならないことは、これらの大多数は宗教改革者や、欽定訳の元になっている伝統的なテキスト(本文)と実質的には一致しているものである」(Zane Hodges, *Which Bible,* 26,250 ; *Answers to Objections,* p.36 参照)。

「これらは公認本文に対してだけでなく、驚くべき数の写本が、時代が違い、国が違い

ながら、同じような聖書として保たれてきたということは、写字生の驚くべき能力に対する強力な証しとなっている」(*Answers to Objections*, p.37)。

これらの驚くほどの写本は、その９５％以上がほとんど一致していて、残りのものがバチカン系のような改悪された写本であるという。



２世紀のパピルス写本はどうか？

日本聖書協会総主事の佐藤氏は、「２世紀の写本というのはほとんどオリジナルから直接書き写したか、せいぜい孫くらいだろうというのが定説となっている。...現在あるものの中でより最高のものを底本にして今回の新共同訳の翻訳がなされたわけである。最高というのは言い換えるとより原本に近づいていったということである」と述べている(アドベンチスト・ライフ１９９４年１２月号ｐ.13)。「１９３０年代以来発見された紀元２００年頃の多くのパピルスが、新約聖書本文に大きな貢献をするようになりました」(バイブル・ロードp.88)。ライフ１９９６年２月号１２ページによると、「ほとんど原本に近い底本が作られ」たと言っている。このように、新共同訳の場合では、「そのテキスト（本文）にかなりの変化（劇的な違い）が生じたことになる」(バイブル・ロードp.89)。つまり、これらの写本の発見によって、19世紀半ばまでの聖書とかなりの変化が生じてきたというのである。

しかし、近代批評家のアーラントでさえ次のように言っている：

「しかし、最も古い写本が必ずしも最良のテキストを持っているとは限らない。たとえば、ｐ.４７（パピルス写本）は黙示録のほとんどを含んでいる最も古い写本であるが、確かに最良のものではない」(Kurt Aland, "The Significance of the Papyri for Progress in New Testament Research," The Bible in Modern Scholarship,ed.J.Phionelip Hyatt, p.333.)　(Which Bible,p27に引用)。

「４世紀、あるいはそれ以前のギリシア語写本で明らかに大多数本文(公認本文)に属すると言えるものは一つもない。しかも、この３０年から４０年にかけて発見されたパピルスはほとんど現代訳（ＡＳＶやＲＳＶのような訳）に使われているギリシア語本文系を支持しているのである。顕著なものは、ルカとヨハネ福音書のほとんどを含んでいるｐ.７５として知られているパピルス写本の発見である。紀元２００年のものとされるこの新しい発見は、あの有名な４世紀のバチカン写本にあるものと実質的には

同じ本文である」（*"Which Bible"* p28-31）。

これらのルーツはエジプトの聖書改悪の中心地、アレキサンドリアと言われている。

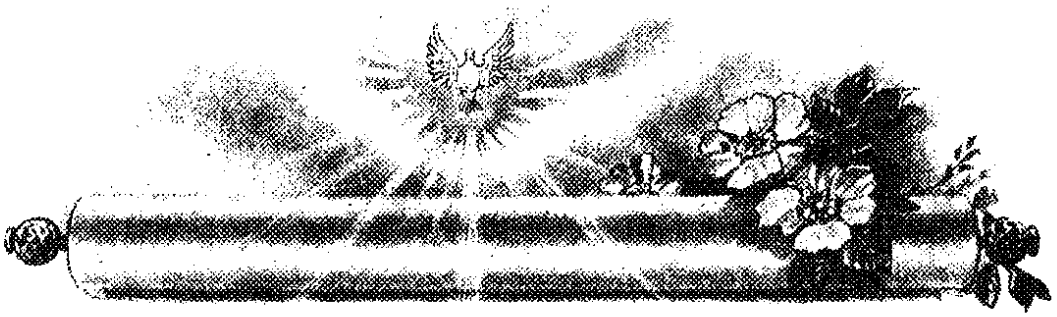
「もう学者たちはｐ．７５（パピルス写本）とバチカン写本は同じ先祖であると認めることに異存はない」（同31）。

これではっきりしてきた。バチカンに１５００年も保管されていたバチカン写本も、シナイ山のふもとのカトリック修道院で１８４４年に発見されたシナイ写本も、２世紀に発見されたパピルス写本も、同類のもので、改悪された写本である。近代批評学者たちが高く評価し、ローマ・カトリックを喜ばせるものである。それなのに、どうしてワルデンセス、荒野の教会に純粋な聖書が継承されたとの預言者と歴史家の証言に耳を閉じるのだろうか？

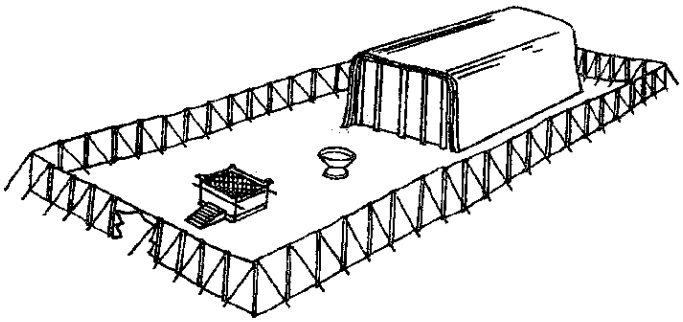
エキュメニカル聖書＝共同訳聖書＝バチカン－シナイ写本を選ぶことは「世に聖書を提供しているのはカトリックである」ことを認めることにならないだろうか？

カトリック教会は自分たちが「聖書の保管者であり、解釈者である」と豪語している（カトリック百科事典Vol 3 ,art. Bible Societies, p.545）（*Modern Bible Translations Unmasked,* に引用）。

進化論でも、盛んにここかしこでミッシングリンク－類人猿と人間をつなぐ動物（橋渡し）を発見して、人間は神に創造されたのではなく、進化したものであることを証明しようとして躍起になっているように、聖書の世界でも使徒たちの書いた原本に限りなく近づきつつあると学者たちは言い張っているが、ローマの罠に陥っているにすぎない。それは神の権威を否定する道なのである。



SDA特殊教理と新共同訳



「本文の違いは、必ずしも、聖書の内容（メッセージ）の違いではない。それは、字句の細部における本文批評学的な違いであって、直接内容に重大な影響のある違いはきわめて限られたものであった」（ライフ 1996 年 2 月 p.13）。はたしてそうだろうか？

では、我々セブンスデー・アドベンチストにとって最も大事な聖句、「再臨信仰の大黒柱であり、土台である」次の聖句を検討してみよう。

サタンが最も憎んでいる大真理は「贖罪の犠牲」と「全能者の仲保の働き」だと言われている：

「サタンは、数えきれないほど多くの策略を考え出してわれわれの心を捕らえ、われわれが最もよく知っていなければならない働きそのものについて、われわれに考えさせまいとしている。大欺瞞者サタンは、贖罪の犠牲と全能の仲保者を明らかにする大真理を憎んでいる。イエスと彼の真理から人々の心をそらすことに、万事がかかっていることを、彼は知っているのである」（大争闘下 p. 221）。

新共同訳は贖罪と仲保の働き、特に再臨信仰の基礎であり、大黒柱であるダニエル８：１４「聖所の清め」にどのように抵触するであろうか？ダニエル９章は８章の大預言の幻の説明であり、その続きであることを覚えておくことは非常に大事なポイントである。聖所はユダヤ人の宗教、生活の中心であった。それが２３００日経って、「清められる」「多くの日の後にかかわる」と言われたダニエルは疲れ果てて数日間病みわずらった。それがいつなのか？どういうことなのかが９章の２５－２７節に説明されるのである。概略だけをごく簡単にまとめてみよう：

1．ダニエル書９：２４～１７

● ９：２４節に７０週の間に何が起こるかという要約が述べられ、２５～２７節にいつ、その様なことが起こるかの詳細な説明がなされている。

① ７０週はユダヤ人とエルサレムのために２３００日の期間から切り取られ、定められている。

② この間に何がなされるか。メシヤの出現、とが、罪、不義のために贖罪の犠牲として十字架で死んで復活することによって永遠の義をもたらす道が開かれる。こうして確実に預言が成就する。キリストの昇天後、天の聖所で大祭司としての働きを始める。（「聖なる者に油を注ぐ」は「聖なる所に油を注ぐ」が正しい）

● ２５節から何がいつ起こるかの預言である。

① 紀元２７年、エルサレム再建命令が出てから７週と６２週経って、メシヤが出現する。

② 紀元３１年、最後の週のちょうど真ん中に十字架にかかる。復活後40日経って天の聖所におけるキリストの仲保の働き開始。

③ 紀元３４年、ユダヤ人の恩恵期間が閉じる。

④ 紀元７０年　エルサレム滅亡。地上の聖所崩壊。

「ここまで、預言に指示されたことはみな、驚くばかりに成就した。そして７０週が紀元前４５７年に始まり、紀元３４年に終わることが疑いの余地なく確定した」（大争闘下 p. 15）。

メシヤの出現、十字架の贖罪の時があまりにも正確に成就したことが再臨運動者たちに、次のステップ―天の聖所での仲保、特に至聖所での「聖所の清め」「最後のあがない」への揺るがない確信を与えたのである。ここが明確でないと、１８４４年への「驚くべき結論」に導かれ得ないのではないだろうか？１８４４年にキリストは天の至聖所に入られた。聖所の清め、最後のあがないのために。この時点でキリスト諸教会はふるわれていったのである。ダニエル９：２４～２７の７０週の預言と８：１４の２３００日の預言に贖罪のワン、ツウ、スリーが最も明確に描かれている。すなわち、①十字架上での身代わりの犠牲②天の聖所での奉仕、③聖所の清め、最後のあがないである。

新共同訳で、このように従来のセブンスデー・アドベンチストの教理を説明できるだろうか？

学者は理屈をこねてできるというだろう。信徒でも単純に説明できるだろうか？

「真理は、公明正大、明瞭明白であって、それ自体を大胆に擁護する。しかし、誤りはそうではない。曲がりくねっているから、そのゆがんだ形にしたがって、それを説明するのに多くの言葉を必要とする」（初代文集 p.189）。

2. ダニエル８：１４

「２３００の夕と朝の間である。そして聖所は清められて、その正しい状態に復する」

ここも新改訳、新共同訳では変えられている。「そのとき、聖所は権利を取り戻す」「日が暮れ、夜の明けること２千３百回に及んで、聖所は元の状態に戻る」と。

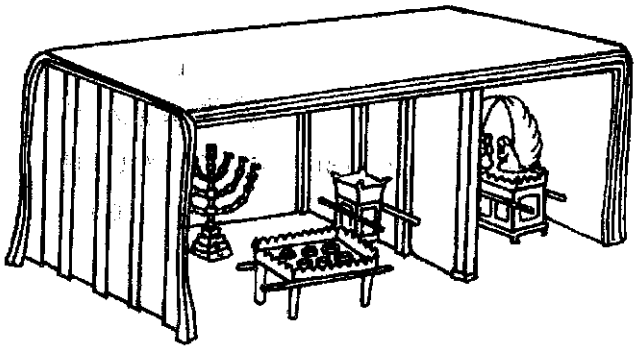
「預言者の霊は預言者に服従する」Ｉコリント１４：３２。預言者ホワイト夫人も、再臨運動の先駆者たちもみな「清められる」と使っていた。その当時でもすでに他の訳で「回復される」再構築される」「権利を取り戻す」等と使われていたが、預言者は「清められる」を使われたのである。「各時代の大争闘下」「人類のあけぼの」で詳しく「聖所は清められる」ことの説明がなされている。天の聖所がなぜ清められなければならないかは、神の民の罪によって汚されるからだと説明している。神の民が罪を告白すると、罪は天の聖所に移され、キリストが負ってくださる。赦され、良心の咎め、罪責はなくなるが、「あがないの日」「聖所の清めのとき」に、完全に除去され、清められ、神の律法の宣告から解放されるまで聖所を汚し続ける。だから、大祭司が至聖所に入って、最後の仲保の働き、「最後のあがない」による「清め」が必要なのである。

預言者の説明は簡単明瞭である。大失望の後、「時」の問題は不動のものとなったので、次の問題は「聖所とは何か」ということであった。それがヘブル書で天の聖所であることが明白になったので、その次の問題は、「聖所の清めとは何か」ということであった。そのために:

「天において清められねばならないものがあるのであろうか」
「どのように天の聖所が汚されるのか」

という疑問を追及していったのである。

もし「聖所は元の状態に戻される」ということだったら先駆者たちが大真理を見出した考え方は変えられ、大争闘はこの様には書かれなかったであろう。ここで大争闘から引用してみよう：



聖所の清めとは何か

「聖所とは何かという質問に対して、聖書ははっきりと解答を与えている。…こうして、『２３００の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する』という預言は、疑いもなく天の聖所をさすのである。

しかし、聖所の清めとは何かという、最も重要な問題が、未解決のまま残っている。地上の聖所に関連してこうした儀式があったことは、旧約聖書に記されている。しかし、天において、清められねばならないものが、あるのであろうか。ヘブル人への手紙９章には、地上と天の両方の聖所の清めが明らかに教えられている。『こうして、ほとんどすべての物が、律法に従い、血によってきよめられたのである。血を流すことなしには、罪のゆるしはあり得ない。このように、天にあるもののひな型は、これらのもの〔動物の血〕できよめられる必要があるが、天にあるものは、これらより更にすぐれたいけにえで、きよめられねばならない」（ヘブル９：２２、２３）。それは、キリストの尊い血である」（大争闘下 p.130）。

こうして、地上の聖所の儀式に目が向けられ、聖所の意味が明瞭にされていく。告白される罪は、天に移される、それによって聖所が汚されるとの説明がレビ記から詳しく解かれる。そして大祭司が至聖所に入り、あがないの日がきて神の民の「もろもろの罪が清められる」（口語訳）のである。

「天の聖所の実際の清めも、そこに記録されている罪を取除くことによって、すなわち消し去ることによって成し遂げられねばならない。…キリストは、…再臨に備えて贖いの働きをするために、天の聖所の至聖所に入られたのだということを知った」（大争闘下 p.136,137）。

「この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである」（大争闘下 p.141）。

この働きを「特別な清め」「特別なあがない」「最後のあがない」と呼ぶのである（大争闘下 p.141, 初代文集 p.410,413）。

これこそ「再臨信仰の土台であり、大黒柱」であるゆえに、教会の内外から攻撃されてきた大真理なである。「サタンがもっとも憎む大真理」「万事がこれにかかっていることをサタンは知っている」（大争闘下 p.221）。フォード博士は、「清められる」は正確な訳ではないと攻撃している。

信徒はヘブル9：23、レビ記16:30、マラキ3：2はみな「清められる」を使っているので、たやすく真理のつながりをたどることができる。

「このように、天にあるもののひな型は、これらのものできよめられる必要があるが、天にあるものは、これらより更にすぐれたいけにえで、きよめられねばならない」（ヘブル 9:23）。

「この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである」（レビ 16:30）。

聖所の清めは、天の聖所の罪の除去だけでなく、神の民の全き清めであることが分かる。

「『その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう。彼は金をふきわける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである。彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる』（マラキ書 3:2,3）。... その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる」（大争闘下 p.140,141）。

「昔の日のように、先の年のように」、つまり人類が罪を犯す前の、仲保者なしに神の前に立てる、罪なき完全な状態にされることを知る。

「聖所は清められる」こそが新約のヘブル書と旧約の聖所の儀式にがっちりと結ばれ、聖所に示されたあがないの儀式が現代に意味をもたらすのである。神の民が罪から清められてはじめて彼らは神の住まいとして回復されるのであり、神の名を負っている彼らを通して神のみ名が擁護されるのである。そしてそれが究極の目的なのである。その意味でダニエル8：14の聖句は宇宙的意味を持っているのである。「聖所は元の状態に戻される、回復される、正しくされる、擁護される」などの意味があるとはいえ、それらはその結果ではないだろうか？清められる、清くされるの類語は聖書にたくさん使われているようであるが、（NITSDAQ）＝ニッツダクという言葉は、全聖書でここだけだそうだ。D.K. ショートの言葉を引用しよう：

「ダニエル8：14の鍵句に聖書のどこにも使われていない『清められる』という言葉が使われている。それは、ちょうど最後の教会の経験は、それ以前のどの教会の経験とも異なることが確かであるのと同じである」（1958,11,A Study of the cleansing of the sanctuary in relation to current enominational history）。

3. ヘブル6：19

口語訳：「幕の内に」、新共同訳：「至聖所の幕の内に」。

イエスは大祭司として、昇天後天の聖所の「幕の内に」入っていかれた。「幕」と言っても庭と聖所を隔てている「幕」と、聖所と至聖所を隔てている「幕」がある。ここでは、原語でどの幕かとは言っておらず、ただ「幕」と言っているのである。現代訳を信じる人々はイエスは昇天後、すぐ天の至聖所に入っていかれたと信じている。フォード博士は共同訳を用いて、イエスは１８４４年ではなく、昇天後すぐ至聖所に入られたと主張している。新共同訳では「至聖所の幕の内に」と訳しているからである。エバンジェリカル（福音主義派）の学者たちはここをついているのである。セブンスデー・アドベンチストのこの真理が「陳腐な、つまらない、無益な」教理として１９５７年に嘲笑されたのである。新共同訳の引照聖句にレビ記１６:2、ヘブル9:２３をあげている。新改訳の欄外にも「天の至聖所」としている。かつて、バーレンジャー長老も同じ事を主張して背教していった。

ホワイト夫人は次のように言っている：

「わたしは、この世界総会（1905）に出席している方々にはっきり言う。バーレンジャー兄弟は、もっともらしい誤りを信じるように自分の心をゆるした。彼は聖書を曲解して心を固くした。真理にはない説を打ち立てた。…もしバーレンジャー兄弟が提示する理論を受け入れると、多くの人々が信仰から離れるであろう。それは我が民が過去50年間立ってきた真理に対抗するものである。わたしはバーレンジャー長老は偽りの光に従っていることを主の名によって語るように言われた。主は彼に聖所の奉仕に関するメッセージを与えられなかった。…わたしは、聖書を新しい光で示す働きが与えられたと思っている者たちに警告する。この働きは神が与えられた解釈の代わりに人間の解釈を取り替えることを意味する。これが天のメッセンジャーたちがバーレンジャー兄弟のやりだした働きに下す判決である」（*Manuscrpt* p.62,1905.）。

この様に、キリストは昇天してすぐ、至聖所に入られたとするなら、再臨信仰の土台である「イエスは1844年に至聖所に入られた」という第一前提を覆すことになる。

※その他聖句の多くの削除、変更については別冊の付録とする。

バチカン、シナイ写本を最高の写本だと言うことによって、聖書を使徒たちから継承しているのはローマ・カトリック教会であり、彼らがその保管者であると言わしめることになる。結局、聖書を世に提供しているのはローマ・カトリック教会であると（D. Hunt, *A Woman Rides the Beast,* p.335 参照）。

ローマ・カトリック教会の聖書に対する態度についてこう言われている。

「我々は聖書でなく、イエス・キリストとその教会とその教えに信仰を言い表しているのである」（*Catholic Answers to Bible Christians,* p.6）。

「ローマ・カトリック教会は、聖書を忠実に読むように奨励する。しかし、同時に聖書の翻訳が教会の伝統と信仰に一致しているかを見る権利を持っていたし、現在も持っているのである」（同上 p.7）。

「我々は聖書によって教会の教えを検証するのではなく、教会が何と言うかという手段によって聖書を理解するのである」（Merele D'Aubigne, *The Reformation in England, vol.1,* p.395.）。

トレント会議で、伝統は教理を定めるにおいて聖書と同等の立場にあると決議された。聖書は今やローマ・カトリック教会が提供していることを認めるなら、教会の権威を聖書以上に認めることになる。最後のテストー日曜か、安息日かの本質的な問題は、曜日の問題ではなく、権威の問題である。

「一方は、地上の権力に服従するしるしを受け入れることによって、獣の刻印を受け、他方は、神の権威に対する忠誠のしるしを選んで、神の印を受けるのである」（大争闘下 p.375）。

カトリック教会の権威は何だと言われているか？

「安息日を日曜日に変更したその行為自体をプロテスタントは認めている。…なぜなら、日曜日を守ることによって、祝祭日を制定し、人々を罪に定める教会の権威を彼らが認めることになるのである」（Henry Tuberville, *An Abridgment of the Christian Doctrine,* p.58）。

聖日（安息日）の変更、日曜日を受け入れることが彼等の権威を受け入れることになるなら、聖書の変更、共同訳を受け入れることは、彼らの権威を認めることになるのではないか。すると、今から神の権威のみを認めるか、ローマの権威を認めるかによって最後のテストに備えることがもう始まっていることになる。

「あらしが迫って来るとき、第三天使の使命を信じると公言していながら、…多くの者が、その信仰を棄てて反対の側に加わる。彼らは、世俗と結合し、その精神を抱くことによって、ほとんど同じ見方で物事を見るようになっている。そして、試練が来ると、彼らはすぐに、安易で一般うけのする側を選ぶのである。(原文では、彼らはそのような選びをするように準備される)」(大争闘下 p.378)。

マインド・コントロールされないように、くれぐれも気をつけようではないか。「油断することなくあなたの心を守れ」と警告されている。

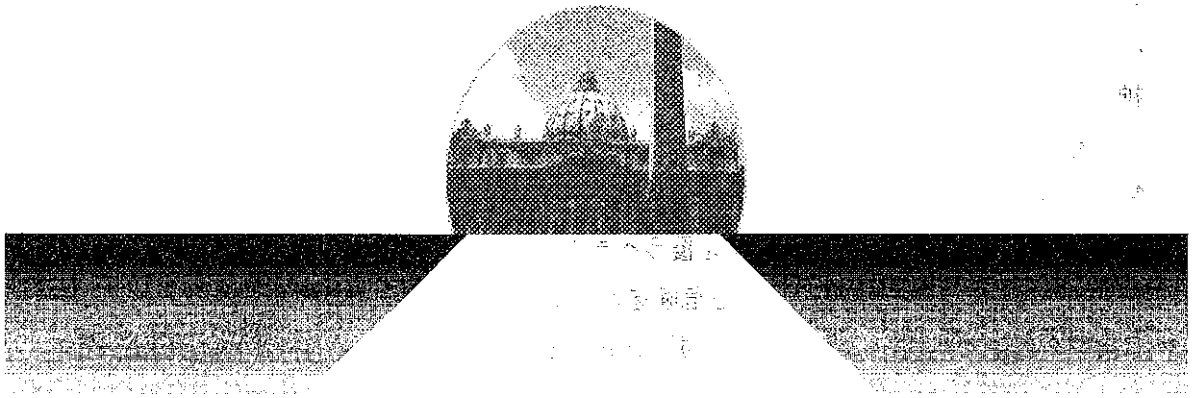
「サタンはいつも、神の代わりに人間に注意を向けさせようと努力している。彼は、人々が自分で聖書を探って自分の義務を学ばないで、監督や牧師や神学者を案内者とするように導く。そうするときに、サタンはこれらの指導者たちの心を支配することによって、大衆を意のままに感化することができるのである」(大争闘下 p360)。

まとめて：新共同訳のねらいは？

- 聖書に対する不敬、不信を起こさせる。
- 再臨信仰の土台を崩すことによって証の書を無効にする。
- 混乱を起こさせ、聖書の解釈者は、学者、教会であるという方向に導く。
- どの聖書も良い、キリスト教会はどちらでも良いとし、「キリストによる愛と一致」を唱えつつエキュメニカル運動へ巻き込んでいく。

「教会と法王教との距離を縮めるのは、背教する教会である」(ＳＴ２-１９、１８９４)と主の僕、ホワイト夫人は言っている。

いよいよローマへの大道（バイブル・ロード）が開通する時代となったのだ。



質問と答え

Q．アンカー１５号、別冊に学者が聖書の言葉を変えたことがあったとありますが、セレクテッド・メッセージ第一巻５ページに、ホワイト夫人は「その可能性はありません」と言っています。矛盾しているのではありませんか？

A．ご指摘ありがとうございました。私もそれを見て驚きました。確かに和訳、セレクテッド・メッセージ第一巻５ページに、「その可能性はありません」とあります。引用してみましょう：

「ある人は真面目に、『写本を書いた人や翻訳をした人に、何か誤りがあったかもしれないとは考えられませんか』と言います。その可能性はありません」。

英語原文によると全く反対のことを言っています。"This is all probable"「それは大いにあり得る」となっています。ご指摘の部分は誤訳です。

使徒たちが死ぬや否や聖書を改悪する仕事が手がけられ、４世紀に「堕落（腐敗）は急速に進んだ」。聖書からの削除、変更、付加が大胆になされたのです。

セレクテッド・メッセージ第一巻の警告は注目に価します：

「聖書は、サタンの攻撃に耐えてきました。…しかし主は、ご自分の奇跡的な力によって、聖書を現在の形に保ってくださいました。…

自分で独特な考えを持ちたいと思い、書かれたものより自分が賢いと思っている人たちがいますが、彼らの知恵は愚かです。…神はこういう意味で言われたのだとか、こう言われるべきであったとか彼らは言うのですが、どんな人間も聖書を改善することはできません。

ある人は真面目に、『写本を書いた人や翻訳をした人に、何か誤りがあったかもしれないとは考えられませんか』と、言います。そういうことは大いにあり得ることです。そして、心が狭く、このような可能性やあり得ることにつまずく人は、霊感を受けた言葉の中にある神秘的な点についてもつまずきます。…

聖書の難しいと思われるようなところをやさしくしようとして、自分の限られた基準で、霊感を受けている部分とそうでない部分とに分けて考えようとする人々は、エリヤが静かな細い声を聞いた時のようにその顔を覆うべきです。…

神は、終末時代に集中して起こる危険をお示しになるにあたって、隠れた奥義をあらわすことを有限な人間にはお任せにならず、また、どこが霊感を受け、どこが霊感を受けていな

いのかの判断をするよう、特定の人間に霊感をお与えになってなどいません」セレクテッド・メッセージ1巻 p.4-6、原文に従い一部変更、訂正)。

その可能性についてホワイト夫人は次のように言っています：

「人間は神の決定を取り消す特別な自由が与えられたかのように行動する。高等批評家たちは、神の立場に自分自身を置き、神の言葉を批評し、改訂したり、あるいは是認したりする。..... もし神の言葉を改悪したり、乱用したり、人間の習わしにこじつけることができなければ、それを破壊するのである」(The Upward Look, p.35.)。

「わたしは、神が聖書を特別に守ってこられたことを示された。しかし、聖書の数が少なかった時に、学者たちがその言葉を変えたことがあった」(初代文集 p.365)。

「それから、『常供の燔祭』(ディリー・サクリファイス)(ダニエル 8:12) の「燔祭」(サクリファイス) という言葉は、人間の知恵によって附加されたもので、本文にはないものであることをわたしは見た」(初代文集 p.155)。

「そしてそれには、偽りの父が直ちに示唆を与えた。古文書が、修道士たちによって偽造された」(大争闘上 p.52)。

――――――――――――

親愛なるベーイブルーク兄弟： January 8, 1980

あなたの本、「ＳＤＡの聖書」に対して心から感謝を申し上げます。

みんながあなたに賛成するわけではないでしょう。しかし、再臨運動の先駆者たちは、ダニエル８：１４、９：２４―２７などの真理を欽定訳から発見したのであることを私たちの教会が知ることは非常に重要なことです。確かに、私たちがある翻訳に依存すると２３００日の預言を提示することは不可能です！

まさに、私たちはあらゆる教理の風が吹きまくる時代に住んでいます。多くの主、多くの神々がいます。しかしながら、神の基は堅く立ちます。願わくは、主が私たちの土台を据えられ、一つのブロックも動かしたり、一つの梁も揺るがされないようにと願う者です。

懐かしの友

W.D.フラジー　　ワイルドウッド　サニタリウム

● モルモンついにエキュメニカルへ

最近まで、モルモンやエホバの証者がエキュメニカル（教会合同運動）に参加することなど一切聞いたことはない。しかし、聖書は全世界が獣に従うと言っている。下記の資料は最近モルモンが押し流されていることを表している：

「『福音主義派、ペンテコステ派、カリスマ運動、リベラルの主流プロテスタント、ローマ・カトリック教会、そしてモルモンは、PROMISING KEEPING RALLIES（プロミス・キーピング）（約束を守る）＝（現在、アメリカに旋風を起こしているエキュメニカル、カリスマ）に参加してきた』*Lutheran Christian News,* May 22,1995」（quoted in *The Remnant,* Oct,1995）。

● アドベンチストーカトリック病院の提携か

Our Sunday Visitor：The Complete Catholic Newspaper, Vol.84, No.36, Jan 7,1996.

カトリックの有名な新聞、Our Sunday Visitor, の健康か富かというコラムに「アドベンチストとカトリックの提携」という記事が載った：

「二つのコロラドの医療センター（一つはカトリック、一つはアドベンチスト）はその力を合わせることにより、米国の医療システムとして州最大の一つになる」

ポーター・ケーア・アドベンチスト・ヘルス・システムとシスターズ・チャリティー・ヘルス・サービスは、合わせて13億ドルの総額収入と約12,000人の雇用人となる」。

「この新しい組織は、1996年の初め頃までには完成すると期待されていて、それは二つの別のクリスチャン医療システムの結合ということになるので米国でユニークなものになる」。

「この結合は互いにキリスト教の働きをしながら、利益を目的とする医療システムの中で、経営が可能になると会社側が言っている」。

注：すべてのキリスト教会の中で、第三天使の右腕と言われる健康、医事伝道の使命を持っているアドベンチスト教会が法王教とその働き、経済の面で結託することは全く不思議でならない。黙示録18章の大いなる叫び、バビロンから出よ、彼女に触れてはならないとのメッセージに相反するものではないか（*Cherith Chronicle,* Jan-Mar,1996より）。

☆お知らせ☆

ビデオ “Which Bible ?”『どの聖書？』 ジョー・マニスカルコ
日本語吹き替え版 ￥4,000-（予価）
聖書の翻訳が氾濫する今日、聖書翻訳の２つの流れ（純粋な聖書と改悪された聖書）をわかりやすく説明する。――６月中発売予定

『アルプスのイスラエル』――ＬＬＴプロダクション制作
ワルデンセスの驚くべき物語！――現在制作中

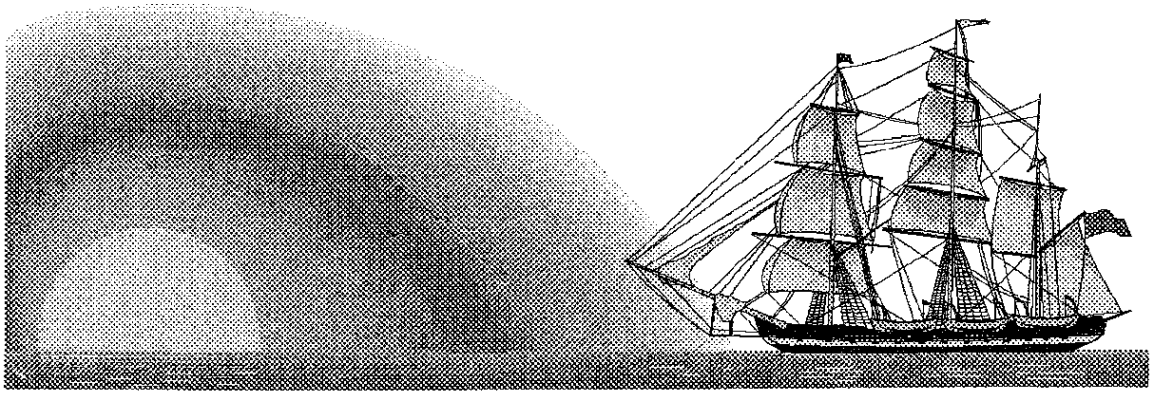
『現代の真理』（改訂版）――近日出版予定
今まで３冊構成だったものを見やすく一つにまとめました。（索引付き）

『前途の危機』 世界総会ホワイト図書資料室 ロバート・Ｗ・オルソン編
終末事件に関するエレン・Ｇ・ホワイトの文章――現在制作中

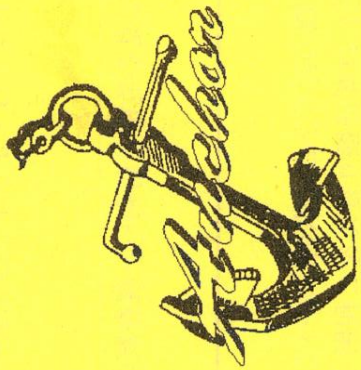
『今は備えの時である』
黙示録13章と14章に見る危機と勝利――現在制作中

★ この印刷物は信徒の皆様の祈りと自由献金によって続けられています。
資料代や献金などの送金には郵便振り替えをご利用ください。
振替口座番号は下記の通りです。

０２０８０－０－１２１２１　　サンライズ・ミニストリー
住所：〒905-04　沖縄県国頭郡今帰仁村今泊1471
サンライズ・ミニストリー出版部　　金城重博
電話：　0980-56-2783（FAX共）



Anchor アンカー 17号

1996 Vol.9 No.1
MAY. 20

平成８年５月２０日発行　第９巻第１号通巻１７号
サンライズ・ミニストリー出版部発行